

# 比 恵 77

— 比恵遺跡群第137次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1320集

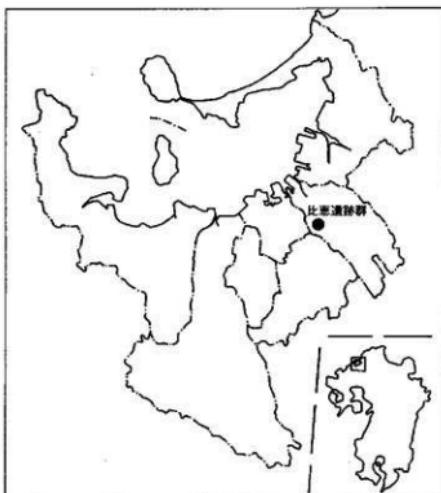
2017

福岡市教育委員会

# 比 恵 77

— 比恵遺跡群第137次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1320集



遺跡略号 HIE-137  
調査番号 1503

2017

福岡市教育委員会



## 序

北部九州は玄海灘を介して大陸・半島と一衣帶水の関係にあり、古代より双方ながら交流が絶え間なくおこなわれてきました。福岡市には、このような交流を裏付ける旧石器時代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの遺跡を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は共同住宅建設に伴って実施した比恵遺跡群第137次発掘調査について報告するものです。この調査では弥生時代終末期～古墳時代の遺構を検出するとともに、弥生時代終末期～古墳時代にかけての遺物が多数出土しました。

これらは地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後本書が文化財保護についての理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、合同会社シェダル様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成29年3月27日

福岡市教育委員会  
教育長 星子 明夫

## 例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が福岡市博多区博多駅南4丁目153-1、153-6、153-7において発掘調査を実施した比恵遺跡群第137次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は、民間受託事業として実施した。
3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、清金良太・辻節子が行った。
5. 本書に掲載した遺物実測図の作成は、清金良太・井上加代子が行った。
6. 本書に掲載した遺構および遺物写真的撮影は、清金が行った。
7. 本書に掲載した挿図の製図は、清金・井上が行った。
8. 本書に掲載した国土座標値は、世界測地系によるものである。
10. 本書で用いた方位は座標北で、真北より $0^{\circ}18'$ 西偏する。
11. 遺構の呼称は、竪穴住居をSC、溝をSD、土坑をSK、ピットをSP、包含層をSXと略号化した。
12. 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
13. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
14. 本書の執筆および編集は、清金が行った。

遺跡名	比恵遺跡群	調査次数	第137次	遺跡略号	HIE-137
調査番号	1503	分布地図図幅名	東光寺037	遺跡登録番号	20127
申請地面積	230.82m <sup>2</sup>	調査対象面積	220.0m <sup>2</sup>	調査面積	157m <sup>2</sup>
調査地	博多区博多駅南4丁目153-1、153-6、153-7				
調査期間	平成27年4月1日～平成27年5月29日				

# 本文目次

I.はじめに .....	1
1. 調査に至る経緯 .....	1
2. 調査の組織 .....	1
II. 遺跡の立地と環境 .....	2
III. 調査の記録 .....	5
1. 概要 .....	5
2. 遺構と遺物 .....	5
1) 堅穴住居 (SC) .....	5
2) 溝 (SD) .....	11
3) 土坑 (SK) .....	11
4) ピット (SP)、包含層 (SX) .....	16
3. 小結 .....	20

# 挿図目次

第1図 比恵遺跡群位置図(1/25,000) .....	3
第2図 比恵遺跡群調査区位置図(1/1,000) .....	4
第3図 第137次調査区全体図(1/80) .....	6
第4図 SC033実測図(1/40) .....	7
第5図 SC033出土遺物実測図(1/3) .....	8
第6図 SC002実測図(1/60) および出土遺物実測図(1/3) .....	9
第7図 SC009実測図(1/60) および出土遺物実測図(1/3) .....	9
第8図 SC034実測図(1/60) および出土遺物実測図(1/3) .....	10
第9図 SC056実測図(1/60) および出土遺物実測図(21は1/2、他は1/3) .....	10
第10図 SC049・050・114実測図(1/60) および出土遺物実測図(1/3) .....	11
第11図 SC045・094実測図(1/60) .....	13
第12図 SD035実測図(1/80) および出土遺物(32は1/4、他は1/3) .....	14
第13図 SD037実測図(1/60) .....	14
第14図 SK015・052実測図(1/40) およびSK052出土遺物実測図(1/3) .....	15
第15図 SK095実測図(1/60) および出土遺物実測図(42は1/3、他は1/4) .....	17
第16図 SK095出土遺物実測図(47、48は1/4、他は1/3) .....	18
第17図 SP090・121出土遺物実測図(1/3) .....	18
第18図 包含層出土遺物(1/3) .....	19

## 表 目 次

第1表 比恵遺跡群第137次堅穴住居一覧表 ..... 20

## 図 版 目 次

- |                                  |                              |
|----------------------------------|------------------------------|
| 図版1 (1) 調査区全景（上空から）              | (2) 調査区全景（上空から）              |
| 図版2 (1) 全体写真1 西側（南西から）           | (2) 全体写真1 東側（南西から）           |
| (3) 全体写真2 西側（南西から）               |                              |
| 図版3 (1) SC002（南から）               | (2) 焼土検出状況（西から）              |
| (3) SC009（南西から）                  |                              |
| 図版4 (1) SC034（南西から）              | (2) SC056（南東から）              |
| (3) SC056石包丁出土状況（南東から）           |                              |
| 図版5 (1) SC049.050.114土器出土状況（北から） | (2) SC049.050.114土器出土状況（東から） |
| (3) SC049.050.114土器出土状況（東から）     | (4) SC049.050.114刀子出土状況（北から） |
| (5) SC094（北東から）                  | (6) SD035（北西から）              |
| 図版6 (1) SD035土層断面（北西から）          | (2) SK018（北東から）              |
| (3) SK052（南から）                   | (4) SK095（東から）               |
| (5) SP090（南西から）                  | (6) SP121（南西から）              |
| 図版7 出土遺物（1）                      |                              |
| 図版8 出土遺物（2）                      |                              |

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

平成27（2015）年1月28日、合同会社シェダルより、福岡市経済観光文化局埋蔵文化財審査課に博多区博多駅南4丁目153-1、153-6、153-7における共同住宅建築に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が提出された。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群に位置しており、申請地の西側では比恵遺跡群第33・34次調査が行われている。同課はこれを受けて平成27年3月11日に確認調査を行った。既存建物解体中の試掘調査であったため、1×1mの狭い範囲の調査に留まった。確認調査の結果、地表面下55cmに遺物包含層、80cmに鳥栖ローム層が確認され、遺構面が残っていることを確認した。事業主と同課は文化財保護に関する協議を持ったが、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、共同住宅が建設される157m<sup>2</sup>を対象に発掘調査を行うことで合意した。その後、平成27（2015）年3月30日付で合同会社シェダルを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、4月1日～同年5月29日まで発掘調査を、翌平成28年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

## 2. 調査の組織

調査委託：合同会社シェダル

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：平成27年度・資料整理：平成28年度）

調査総括：埋蔵文化財調査課（現・埋蔵文化財課） 課長 常松幹雄

同課調査第1係長 吉武学

庶務：埋蔵文化財審査課（現・埋蔵文化財課） 管理係長 大塚紀宜  
川村啓子（27年度）  
入江よう子（28年度）

事前審査：埋蔵文化財審査課（現・埋蔵文化財課） 事前審査係長 佐藤一郎

同課事前審査係主任文化財主事 池田祐司

同課事前審査係文化財主事 板倉有大（27年度）  
清金良太（28年度）

調査担当：埋蔵文化財調査課（現・埋蔵文化財課） 文化財主事 清金良太

発掘調査：梅野真澄、緒方圭子、久保和美、柴田秀人、進藤正長、辻節子、廣瀬公則、松本順子、  
三谷朗子、宮崎正、室井三太郎、森光真理、山本千加子、吉岡田鶴子、吉田哲夫、  
渡辺清嗣

整理作業：大石加代子

その他、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について事業主様をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事に終了することができました。ここに深く感謝します。

## II. 遺跡の立地と環境

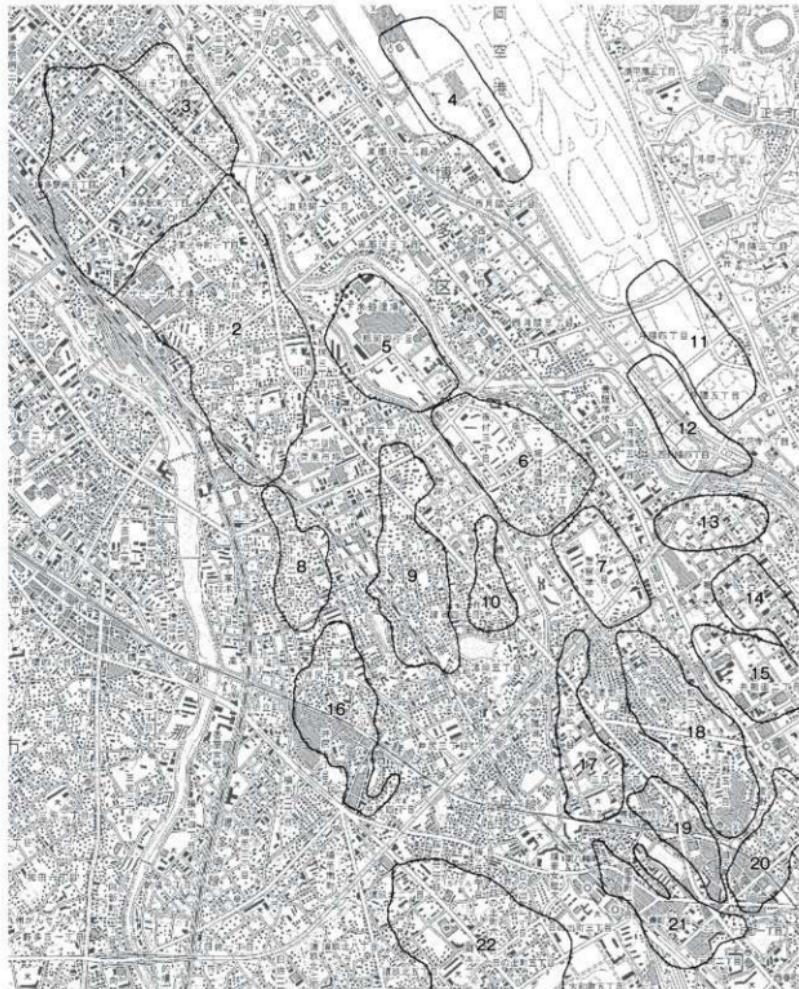
比恵遺跡群は福岡平野のはば中央に位置しており、隣接する那珂遺跡群と共に東側は御笠川、西側は那珂川に挟まれた丘陵上に位置する遺跡である。那珂遺跡群とは浅い谷によって区分されている。比恵遺跡群の立地する丘陵は、かつての沖積作用によって細かい谷が複雑に入り込む丘陵であり、今回の調査地点は丘陵の西斜面に位置している。また、この台地の南側は春日丘陵と連なり、那珂遺跡群、井尻遺跡群、さらに南には須玖岡本遺跡群を中心とした遺跡群が広がる。比恵遺跡群の立地する台地は花崗岩の風化礫層を基盤に、その上に粗砂、細砂、腐食土層、阿蘇山の火碎石による八女粘土層・鳥栖ローム層が形成される。今回報告する比恵第137次調査では鳥栖ローム上から遺構検出を行っている。比恵遺跡群において、初めに遺構が確認されるのは弥生時代前期であるが、後期旧石器時代ナイフ型石器や彫器が台地辺縁の比恵第19次、那珂第38・41次調査で検出されている。縄文時代も同様であり、前期の深鉢が比恵第30次調査から出土している。弥生時代に入ると那珂第37次調査では2重環濠が掘削されている。比恵遺跡群では北西部を中心に、貯蔵穴などが見つかっている。

弥生時代中期に入ると堅穴住居・貯蔵穴等が各地に広がると共にこの頃から壇塚墓の形成も始まる。弥生時代中期後半になると、比恵第58次などで検出された南北方向の区画溝が継続し、その周辺には掘立柱建物が配置され、青銅器生産関連遺物や舶載金属器が多く出土している。

弥生後期に入ると堅穴住居等の遺構は低调になるが、井戸等の掘削は引き続き行われている。弥生終末期から古墳時代初頭にかけて堅穴住居の数は大幅に増える。これに従って、西側で行われた比恵第33・43次調査では多数の井戸が検出されている。また、比恵第2次調査では大溝の一部が確認されており、集落を囲むような環濠が確認されている。さらに、比恵第45・62・99次調査等では陸上を直線的に走る並列した2本の溝が確認されている。この2本の溝の間は、基本的に同時期の遺構が極めて少ない。また、溝は那珂遺跡群まで続いているが、丘陵上を南北に走っており、総延長は1.5kmをこえている。2本の溝の間に舗装面こそ確認されていないが、道路状遺構の可能性が指摘されている。溝を掘削した年代の上限は弥生時代後期後葉であり、古墳時代初頭を通じて溝としての機能を果たしていたことが、出土した土器からうかがえる。この道路が首長居館との関連が指摘されている2号方形環濠や墓域等の配置に影響を与えたことが分かっている。比恵第137次調査ではこの時代の堅穴住居跡を多数検出している。

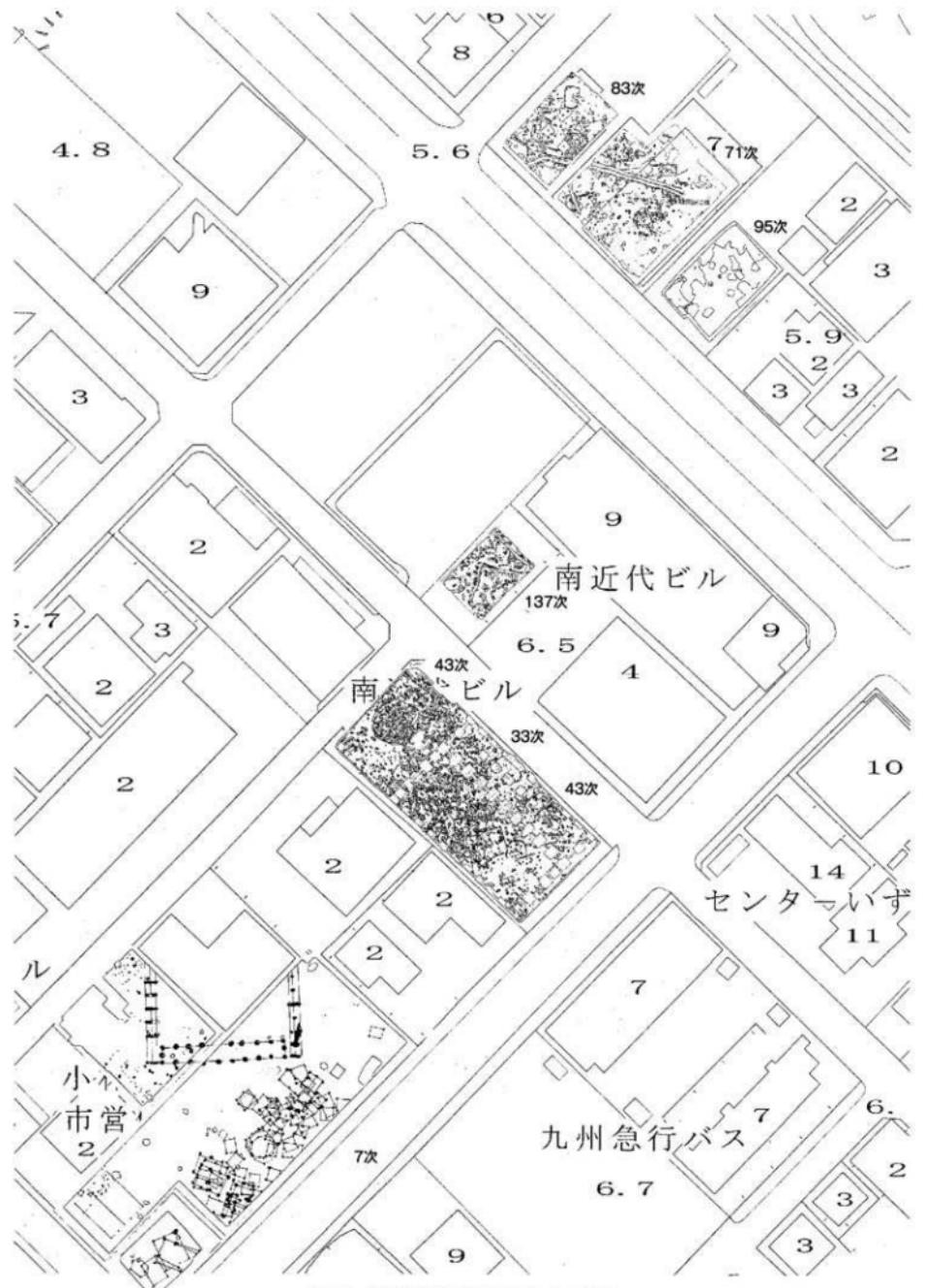
古墳時代後期には劍塚北古墳の造営を契機として、阿蘇凝灰岩製の石屋形をそなえた横穴式石室を持つ前方後円墳である東光寺剣塚古墳が位置している。また、古墳時代後期後半以降、大型の掘立柱建物や柵列が見つかっており、日本書紀宣化天皇元年（536年）条にみえる「那津官家」との関連が指摘されている。また、南側に位置する那珂遺跡群についても比恵遺跡群と同様に、少し遅れて掘立柱建物群が確認されている。那珂遺跡群第19・24次等ではこのころ出土する初期瓦は、比恵遺跡群では出土せず、掘立柱建物との関連が指摘されている。

古代以降、比恵遺跡群で確認できる遺構の数は激減しており、集落の中心は那珂遺跡群に移行する。比恵遺跡群、那珂遺跡群周辺の遺跡では、板付遺跡があり、日本最古の水田遺跡、弥生時代前期の環濠集落などがあり、弥生時代前期の壇塚墓から細形銅劍・銅矛が出土している他、弥生時代後期の堅穴住居からは小銅鐸が出土し、国指定史跡となっている。さらに南側の井尻遺跡では弥生時代の集落と壇塚墓が検出され、青銅器生産関連遺構やガラス勾玉鋳型が出土し、工房があったとされている。また、7世紀末から8世紀初頭には寺院・官衙遺構が営まれている。



- |           |           |           |          |           |
|-----------|-----------|-----------|----------|-----------|
| 1 比恵遺跡群   | 2 那珂遺跡群   | 3 山王遺跡    | 4 雀居遺跡   | 5 那珂君体遺跡  |
| 6 板付遺跡    | 7 高畠遺跡    | 8 五十川遺跡   | 9 諸岡A遺跡  | 10 諸岡B遺跡  |
| 11 下月隈C遺跡 | 12 立花寺B遺跡 | 13 井相田D遺跡 | 14 仲島遺跡  | 15 井相田C遺跡 |
| 16 井尻B遺跡  | 17 三筑遺跡   | 18 麦野A遺跡  | 19 麦野B遺跡 | 20 麦野C遺跡  |
| 21 南八幡遺跡  | 22 須玖遺跡   |           |          |           |

第1図 比恵遺跡群位置図 (1/25,000)



第2図 比恵遺跡群調査区位置図 (1/1,000)

### III. 調査の記録

#### 1. 概要

今回報告する比恵遺跡群第137次調査区は、博多区博多駅南4丁目2-26に所在し、調査前の現況は標高約6.6mを測る家屋解体後の平地であった。調査地点は遺跡の北西部に位置し、隣接する南西側では第33・43次調査、同様に北側では第71、83、95、106次調査の各調査が実施され、更にその周囲でも数多くの調査が進んでいる。

本調査区は表土および客土のほぼ直下に包含層があり、その下に遺構面である、鳥栖ローム層があり、北東側が高く、南西側に向かって緩やかに下る。また、全面的に遺構面上には、SX001として後述する暗茶褐色土の弥生時代終末期の包含層が堆積していた。遺構面の標高は南西端部で4.54m、北東端部で4.95mを測る。

遺構検出は包含層上面までを重機で剥ぎ取って実施し、以下は人入によって作業を行った。今回の調査では、弥生時代終末期の堅穴住居、土坑、古墳時代後期の溝等を主体として確認でき、出土遺物量は、コンテナケースにして35箱である。

発掘調査は平成27(2015)年4月1日に着手した。まず、重機による表土剥ぎ取りから開始し、翌日に発掘器材やリース器材を搬入した。その後壁面清掃、遺構面保護、世界測地系によるトラバース杭の設定等を実施し、遺構検出を開始した。順次、南西側から検出遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化、遺物取り上げ、周辺測量等の作業を進め、遺構の掘削作業がほぼ終了したのに合わせてスカイマスターによる全体写真の撮影を2回行った。その後、残る図化作業や個別遺構写真撮影、片付け、重機による埋め戻し等を終え、5月29日に第137次調査を終了した。

なお、調査対象面積は、「I.-1.調査に至る経緯」とおり、220m<sup>2</sup>であったが、隣接する既往の調査区の一部を重複して表土剥ぎを行ったため、今回実際に作業を行った面積は157m<sup>2</sup>であった。調査時の遺構番号は、001から3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述するが、掘立柱建物を構成する柱穴や堅穴住居内の施設については、報告の便宜上必要に応じて遺構毎にP1から順に番号を付した。

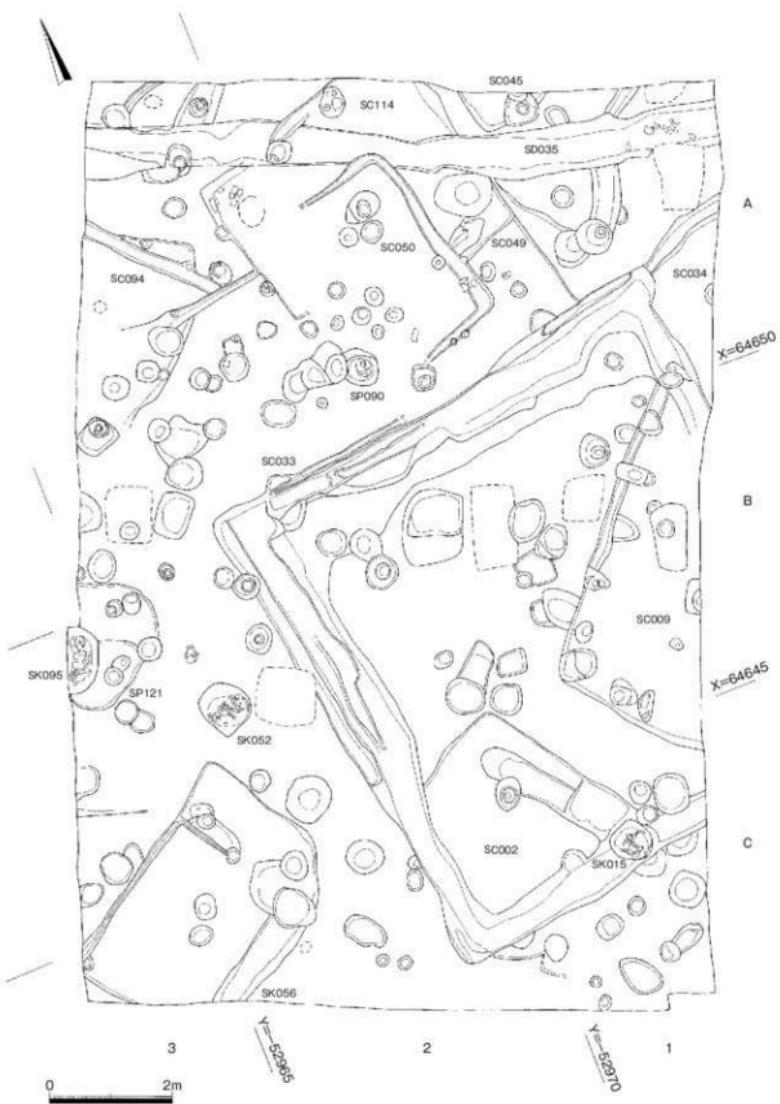
#### 2. 遺構と遺物

以下、遺構種別に報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における世界測地系による10m単位の平面座標を基準とした英字（北から南にA～C）と数字（東から西に1～3）の組み合わせによるグリッド表記を用いる（第4図参照）。

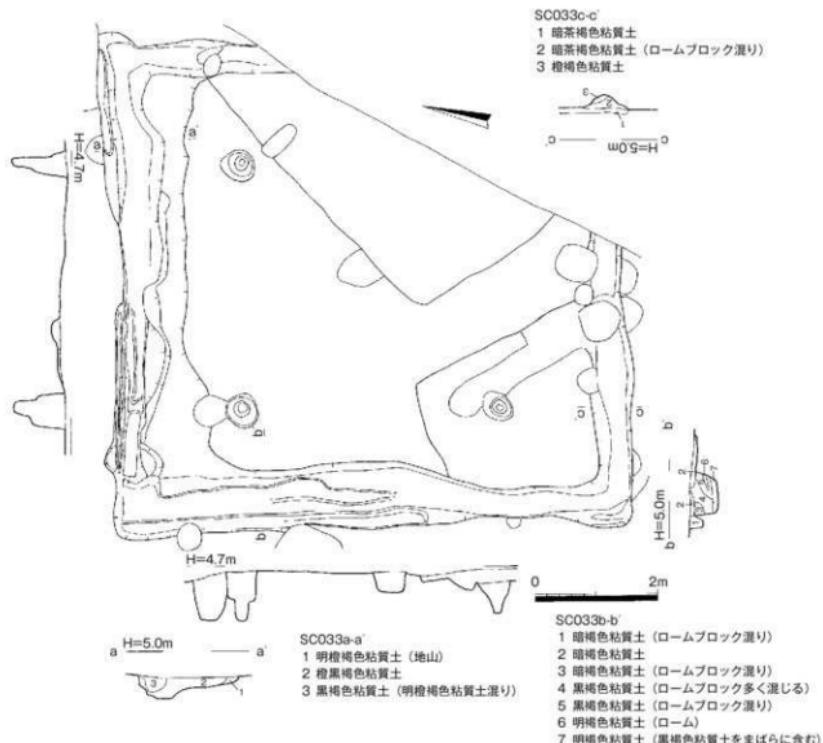
##### 1) 堅穴住居 (SC)

SC033(第3、4図) A-1・2、B-1・2、C-1・2区で検出した。南北方向8.4m、東西方向約8.4mの大型堅穴住居である。4本柱であり、柱間の距離は4m～4.2mを測る。また、堅穴住居の内部外周には2重に「溝」のようなものが検出された。外側の1周目は幅約20cm、深さ20cmほどで浅かったが、内側の2周目は幅約70cm、深さ45～50cmであり1周目と比較して2周目の方が深かった。南側では1周目はおそらく削られてしまい検出できなかったが、1周目に木の板等を挟み、2周目でそれらを支える機能があったのではないか。

出土遺物（第5図）1～3、5、6は甕である。1は口径29.6cmを測り内面、外面ともに横ナデがみられる。2は口縁部から内面にかけて横ナデ、外面の胴部にはハケ目が見られる。



第3図 第137次調査区全体図 (1/80)

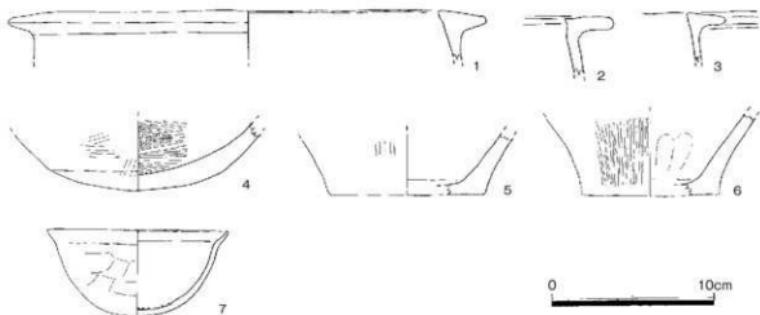


第4図 SC033実測図 (1/40)

3は全面が磨滅している。4は壇である。残存高は約4.4cmである。内外面共にハケ目を施すが、内面のハケ目は細かく、外側のハケ目はやや太い。5は底径約9.8cm、残存高は約3.8cmである。内面は磨滅してわからないが、外側にはハケ目が少し確認できる。6は底径約8.4cm、残存高は約5.0cmである。内面は指押えの後ナデ調整、底面はナデである。外側にはハケ目が見られる。7は小型丸底壺（鉢）である。口径10.8cm、高さ5.3cmを測る。内面はナデ調整、外側は口縁部は横ナデ、頭部から下はヘラ削りがみられる。時期としては弥生時代中期中葉と考えられる。

SC002 (第3、6図) B-1・2、C-1・2で検出した。北側から東側にかけての一部のみ検出でき、深さは約5cmの堅穴住居であり、一部をSC033に切られる。残りの西側から北側にかけては削られ検出できなかった。またSC002に伴うと考えられる竈らしき被熱を受けた痕跡を2か所検出している。どちらか1方は別の住居に伴う可能性も考えられるが、既に削られており検出はできなかつた。

出土遺物 (第6図) 8は甕である。全体的に磨滅が激しいが、体部外側には一部横ナデが確認でき



第5図 SC033出土遺物実測図 (1/3)

た。9はミニチュア土器の完形である。口径4.8cm、底径4.0cm、高さ約3.4cmである。内面は指押さえの後、ナデがみられ、外面には工具と思われるがナデが確認できる。底部はナデである。遺物が少ないが時期としてはSC033よりも前出する。

SC009(第3、7図)B-1、C-1で検出した。1辺2.5m以上、深さ約16cmの竪穴住居で2本柱であると考えられる。焼土が南側の床面に広がっており、焼失住居の可能性も考えたが、北側には広がっていなかった。また、窓も確認できた。北東側の壁には溝が掘られており、壁溝が広がっていた。

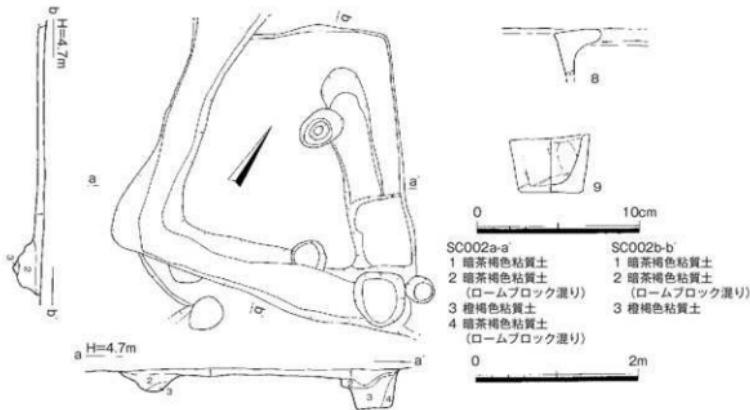
出土遺物(第7図)10~14は甕である。10は内面外面共にナデである。11の内面は磨滅して確認はできないが、外面はナデである。12は外面上部が横ナデであるが、それより下はハケ目が施されている。13は底径約11.0cm、残存高は4.2cmである。14は底径約10.5cm、残存高は約4.0cmである。内面と底部はナデ、外面にはハケ目調整が確認できる。時期としては弥生時代中期後葉と考えられる。

SC034(第3、8図)A-1、B-1で検出した。SC009に切られており、調査区内ではその一部が検出されたのみである。北西側は竪穴住居の肩が2段検出されている。

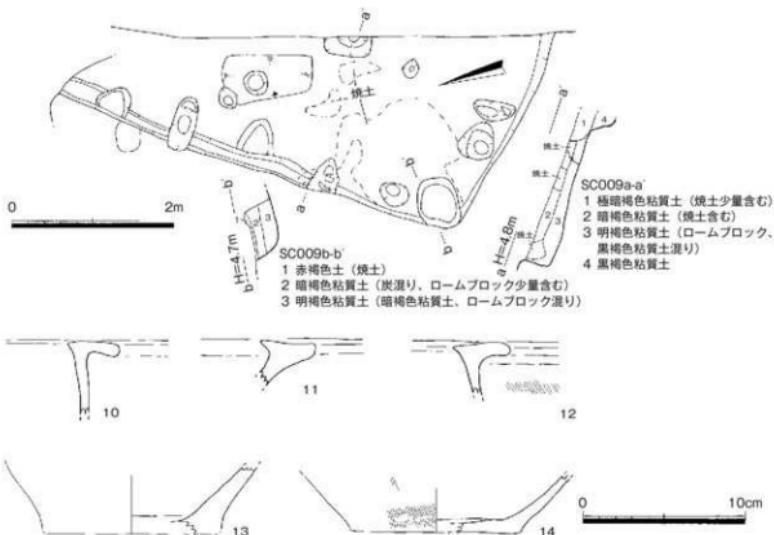
出土遺物(第8図)15、16は甕である。15は外面、内面共に磨滅しており、外面の一部に横ナデがみられる。16の内面上部は横ナデ、その下はナデである。頭部は磨滅しているが、外面上部は横ナデ、その下はハケ目がみられる。時期としてはSC009よりも前出する。

SC056(第3、9図)B-2、C-2・3で検出した。SC056は1.42m×2.8m以上、深さが0.06m~0.13mある小判形の竪穴住居である。南西側もベッドの可能性があり、さらに南西側に広がると考えられる。

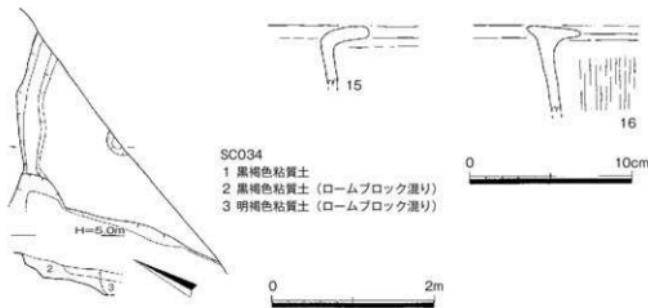
出土遺物(第9図)17~19は甕である。17は口径38.7cmで、残存高は5.4cmである。18は底径9.0cm、残存高は12.2cmである。内面は底部から指押サエの後ナデ、上部はハケ目が見られる。外面は底部付近にナデがみられ、底部はナデである。19は底径8.4cm、残存高は約5.0cmである。外面には丁寧なハケ目がみられる。20は甕である。底径10.2cm、残存高は約10.0cmである。内外面共に磨滅して調整は不明である。底部には穿孔がみられ、内部から外部に向けて穿孔したと考えられる。21は石包丁である。石材は凝灰岩かと考えられ、表面に浅い摩擦痕がみられる。2か所穿孔してあり、裏面・表面それぞれから穿孔したと考えられる。時期としては弥生時代中期後半と考えられる。



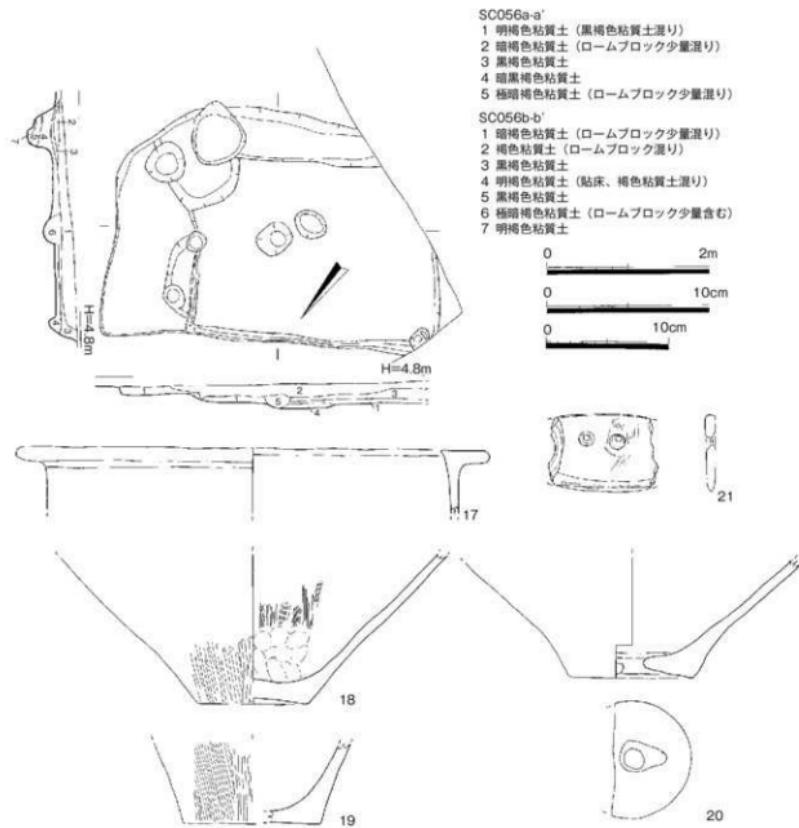
第6図 SC002実測図（1/60）および出土遺物実測図（1/3）



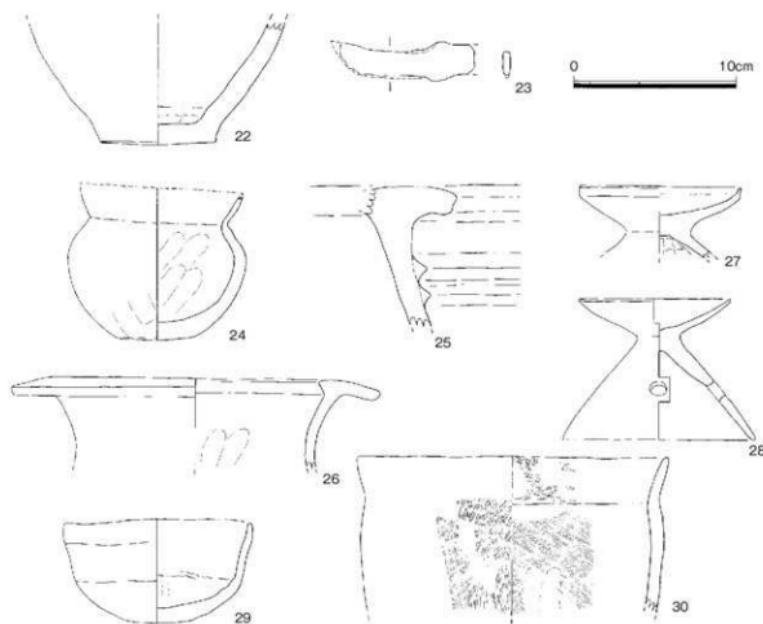
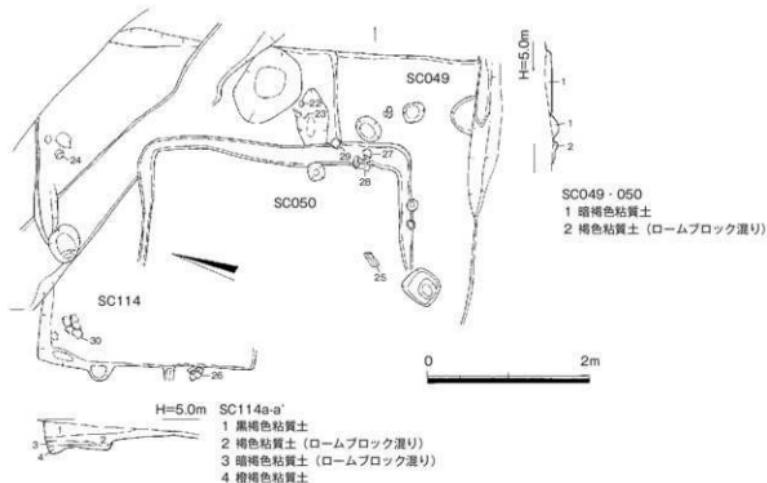
第7図 SC009実測図（1/60）および出土遺物実測図（1/3）



第8図 SC034実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/3)



第9図 SC056実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (21は1/2、他は1/3)



第10図 SC049・050・114実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/3)

SC049・050・114（第3・10図）A-1・2で検出した。3基の竪穴住居が検出された。SC049は床面のみが残っている状況でSC114とSC050に切られており、深さ0.06mであった。SC050はSC049を切っており、東側のみを検出した。同じく床面のみを検出し南北は長さ2.22m、深さ0.06mであった。SC114は2.8m×3.75mの竪穴住居で深さ28cmであった。

出土遺物（第10図）22は甕である。SC114で出土した。底径7.1cm、残存高は7.5cmである。内面底部には指押さえがみられるが、その他の調整は磨滅が激しい。23は鉄製品の刀子である。SC110で出土した。長さは13.2cm、幅2.4cm、厚さは3~3.5mmであった。24は小型丸底壺である。SC050で出土した。内面は底部から肩部にかけてナデ、外面は口縁部から肩部にかけて横ナデ、肩部から胴部下部にかけてナデ、底部は工具によるナデがみられる。25は甕である。SC049で検出した。内面はナデで、口縁部から外面上部まで横ナデである。その下にはハケ目が確認できる。突帯が一条廻る。26は壺である。内面の一部と外面には丹塗りの痕跡がみられる。口径は22.6cmで、残存高は5.4cmである。27は高杯である。SC050で検出した。口径は10.0cm、残存高は4.3cmである。ほぼ全面磨滅しており調整痕は不明である。底部内面は工具によるナデがみられる。28は器台である。SC114で検出した。調整は磨滅のため不明である。脚部に穿孔が確認できる。29は鉢である。SC114で検出した。内面底部には工具で削った痕跡が残り、その後ナデが確認できる。内面口縁部は強い横ナデが確認できる。外面はナデである。30は甕である。SC114で検出した。内面外面共に細かいハケ目が確認できる。時期としてはSC114が弥生時代中期後葉と考えられ、切り合いの関係からSC049はSC114よりも前出し、SC050はSC114よりも後出す。

SC094（第3、11図）A-2で検出した。深さ15cm程の竪穴住居であるが、南西側では削られて検出できなかった。遺物は破片ばかりで図化に耐えうるものは出土しなかった。

SC045（第3、11図）A-1で検出した。深さ0.15~0.2m程の竪穴住居と考えられる。調査区の関係で一部のみ検出した。遺物は破片ばかりで図化に耐えうるものは出土しなかった。

## 2) 溝 (SD)

SD035（第3、12図）A-1、2で検出した。幅は約0.65m~0.84m、深さは約0.19m~0.22mであった。溝は今のは筑紫通りに平行する形で、南東から北西に走る。

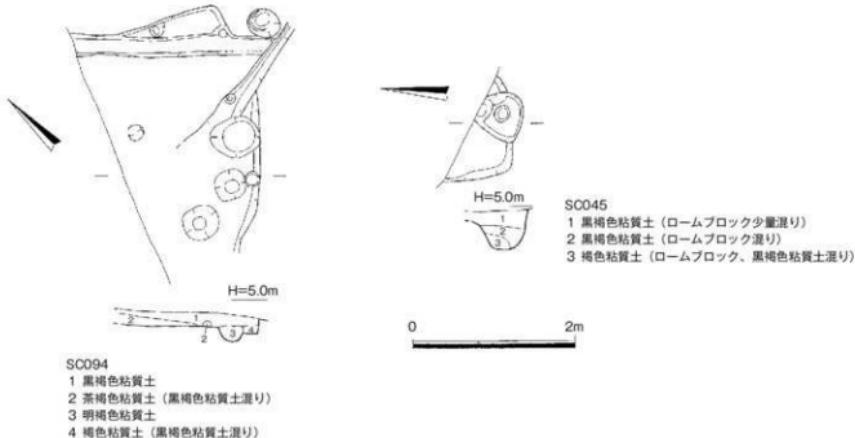
出土遺物（第12図）31、32は須恵器である。31は杯身である。口径は約12.2cm、受部径は約14.4cm、残存高は4.3cmである。内外面共に回転ヘラ削り調整で仕上げている。また、底部にはヘラ記号が確認できる。32は壺である。口径は16.8cm、残存高は10.6cmである。内面口縁部から頸部にかけてヨコナデ、頸部から胴部にかけてタタキがみられる。外面は口縁部から頸部にかけてタタキからナデ、頸部から胴部にかけて平行タタキからカキメが確認できる。33は高杯の脚部である。底径約11.5cmである。内部下部はナデ、上部は指押さえが確認できる。外部の下部はナデである。34は蓋である。上部径は6.8cm、残存高は6.5cmである。内部調整は磨滅して不明であるが、外部はハケ目がみられる。

SD037（第3、12図）A-1で検出した。幅約0.45m、深さ約0.12mであった。遺物は破片ばかりが出土しており、図化に耐えうるものは出土しなかった。

## 3) 土坑 (SK)

SK018（第3、13図）C-1で検出した。ほぼ円形を測る土坑で、長径0.77m、短径0.62m、深さ0.2m、覆土は暗褐色粘質土であった。遺物は出土したが、大きいもので胴部の一部と破片が多く、今回は紙幅の関係で割愛した。

SK052（第3、13図）B-2で検出した。ほぼ円形を測る土坑で、長径0.88m、短径0.84m、深さ0.3m、覆土は暗褐色粘質土であった。

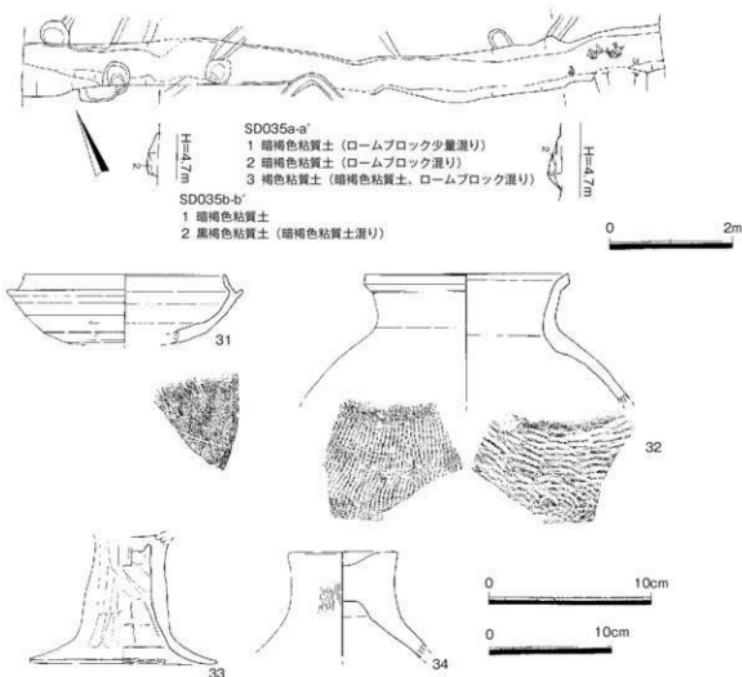


第11図 SC045・094実測図 (1/60)

出土遺物（第13図）35は甕である。口径19.2cm、残存高は約18cmである。内面は口縁部から頭部にかけてナデのあと細かいハケ目のようなものがみられる。頭部から胴部最大径部にかけてはハケ目、その下にはナデがみられる。外面は口縁部から胴部最大径部にかけて指押えの後にハケ目が確認できる。その下底部付近はタタキがみられる。36は壺である。口径15.2cm、残存高は約6.0cmである。内面は口縁部から頭部にかけて横方向のハケ目、頭部から下はやや密な横方向のハケ目がみられる。外部は口縁部から頭部にかけて横ナデ、頭部から下はハケ目がみられる。37は鉢である。口径約20.4cm、残存高は約12.0cmである。内面は横方向のハケ目がみられる。外面は縦方向のハケ目がみられ、底部付近は削りが確認できる。38は甕である。口径約19.0cm、残存高は約9.6cmが残る。内面は横ナデがみられ、外面頭部より下にはハケ目が確認できる。

SK095（第3、14図）B-2、3で検出した。ほぼ円形の土坑である可能性が高い。径約1.1m、深さ約0.9mを測る。覆土は暗茶褐色粘質土である。

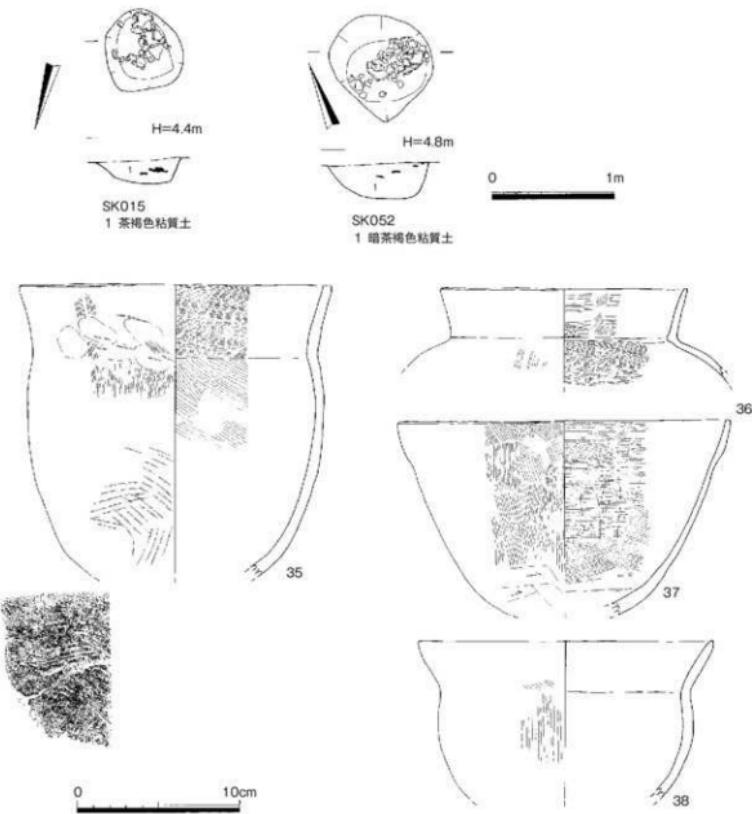
出土遺物（第14、15図）39から42は甕である。39は口径22.6cm、高さ34.8cmを測る。内面は口縁部から頭部にかけてナデ、頭部から底部にかけて横ハケ、ナデが確認でき、底部には指押さえが見られる。外面は口縁部から頭部にかけてナデ、頭部から底部にかけては、ハケ目が確認できる。40は口径25.5cm、残存高は26.6cmである。口縁部は内面、外面共に磨滅が激しい。内面頭部から下にはハケ目、外面も頭部から下にはハケ目が確認できる。41は口径24.6cm、残存高は約30cm程である。内面、外面共に磨滅が激しい。内面の一部には指押さえの後、ハケ目が確認できる。42は残存高が約9.6cmである。内面、外面共にハケ目が確認できる。43、44は壺である。43は口径18.4cm、最大径約29.0cm、残存高は約24.1cmである。内面の口縁部から頭部にかけて指押さえ、胴部はナデがみられる。外面は口縁部から胴部にかけて、ハケ目が確認される。また、頭部と胴部下部にはそれぞれ突帯がみられ、ナデの後、工具による刻目が確認できる。44は口径17.8cm、残存高は9.8cmである。内面は口縁部から肩部にかけてハケ目がみられる。内面胴部は磨滅している。外面も口縁部から胴部にかけてハケ目が



第12図 SD035実測図 (1/80) および出土遺物 (32は1/4、他は1/3)



第13図 SD037実測図 (1/60)



第14図 SK015・052実測図 (1/40) およびSK052出土遺物実測図 (1/3)

確認できる。また、頭部には突帯がみられ、ヘラ工具による刻目が確認できる。45~48は器台である。45は口径17.2cmで、残存高は9.8cmである。丁寧な成形で端が大きく開く形である。内面は口縁部から頭部にかけて粗いハケ目がみられ、頭部は指押さえ、その下はハケ目が確認できる。外面が口縁部から粗いハケ目がみられる。46は口径17.1cm、残存高は5.5cmである。端が大きく開く形である。内面外面共に粗いハケ目が確認できる。46は底径21.6cm、残存高は13.1cmである。端が大きく開く形である。内面の下部は粗いハケ目であるが、その上はやや細いハケ目が残る。外面は粗いハケ目が残る。48は底径23.0cm、残存高は約15.1cmである。端が大きく開く形である。内面にはやや細いハケ目がみられる。外面には粗いハケ目が確認できる。49は杏形器台である。完形品で出土した。底径13.8mm、高さ12.2cmである。頭部には穿孔がみられ、内面上部は太いハケ目がみられ、その下はハケ目が確認

できる。底部はナデである。外面上部は縁を指揮え、部分的にナデ、タタキが確認できる。頭部は指ナデ、その下はハケ目が確認出来る。

#### 4) ピット (SP)、包含層 (SX)

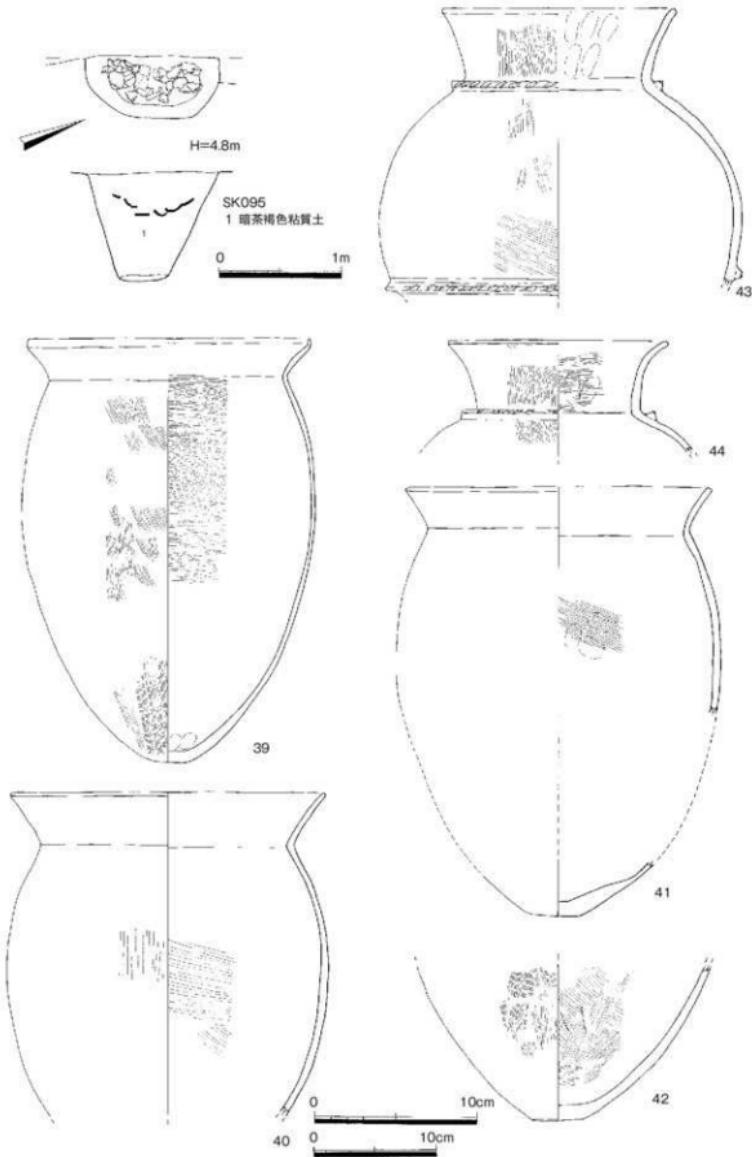
SP090 (第3、16図) 50は壺である。口径21.0cm、高さ20.4cmである。胴部最大径は約19.0cmであり、口縁径より小さい。内面は口縁部から頭部にかけてやや粗いハケ目がみられる。胴部は上部からハケ目、ナデ、底部には指揮えの後ハケ目が確認できる。外面はやや粗いハケ目がみられる。

また胴部には穿孔した跡がみられる。51は壺である。口縁部の小片のみ出土した。内面から外面の上部までナデ、その下はハケ目である。52は手捏ねのミニチュア土器である。内面はヘラ削りの後、指揮えが確認できる。外面は幅2.5cm程の間隔で面取り状に横方向のハケ目がみられる。

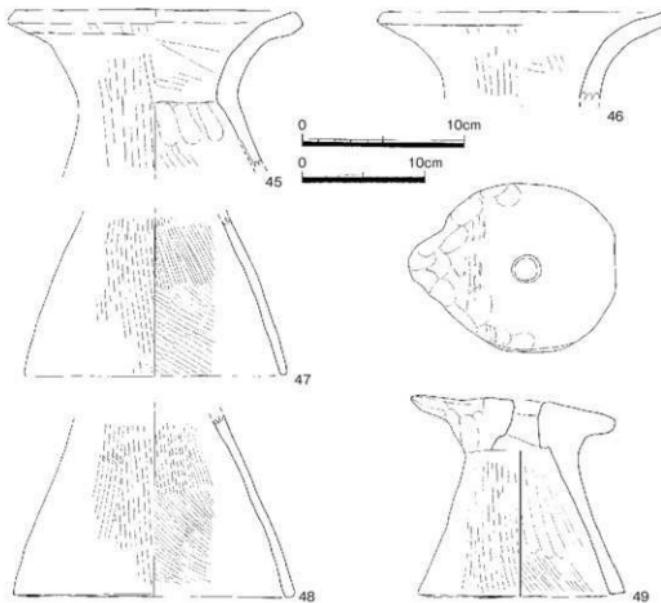
SP121 (第3、16図) 53は高杯である。口径11.4cm、底径10.6cm、高さ8.4cmで完形である。杯部はナデ調整、脚部内面は指揮えの後、横ハケが確認できる。54は壺である。口径19.0cm、残存高は5.6cmである。内面の口縁部から頭部にかけては横ナデ、頭部から下はヘラ削りである。外面は口縁部から頭部にかけて横ナデ、頭部から下はナデがみられる。55は小型の壺である。口径は12.6cm、高さ6.4cmである。

SX001 (第17図) 56は須恵器の坏である。内面は回転横ナデ、外面は回転ヘラ削りがみられる。57、58は壺である。57は壺の上部で内面は横ハケ、外面はナデがみられる。58は壺の上部で内面には横ハケ、外面にはハケ目が確認できる。59は壺である。底径約9.0cm、残存高は約9.6cmである。外面内面共に磨滅している。60は壺である。底径約10.6cm、残存高は約6.0cmである。内面外面共に磨滅しており調整は不明である。61は底径約8.0cm、残存高は約4.2cmである。内面外面共に磨滅しており調整は不明である。底部には径約2cm程の穿孔がみられる。62、63は高杯である。

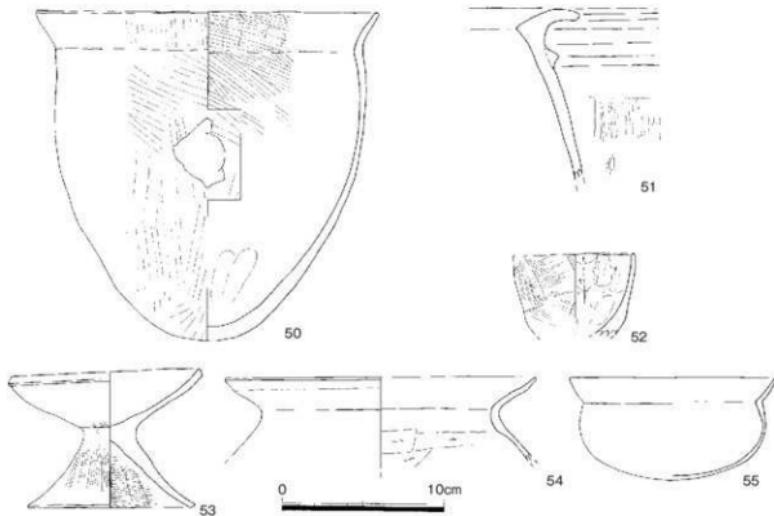
62は高杯の脚部を中心に残る。底径11.6cm、残存高は約6.8cmである。脚部の内面上部には捩じっているような痕跡が確認でき、その下には指揮えがみられる。また、径0.8~1.0cmの穿孔が2ヶ所している。63は高杯の脚部である。64は器台である。口径約13.0cm、底径11.8cmである。内面上部はナデ、下部はケズリがみられる。外面の口縁部はナデ、それより下はハケ目がみられる。65、66は砾石である。65は頁岩とみられ、現存長は10.3cm、幅2.9cm、最大厚2.6cmである。66は頁岩とみられ、現存長は14.3cm、幅3.5cm、最大厚2.0cmである。67は石包丁とみられる。石材は凝灰岩とみられる。現存長3.9cm、現存幅3.7cm、厚さ0.6cmである。



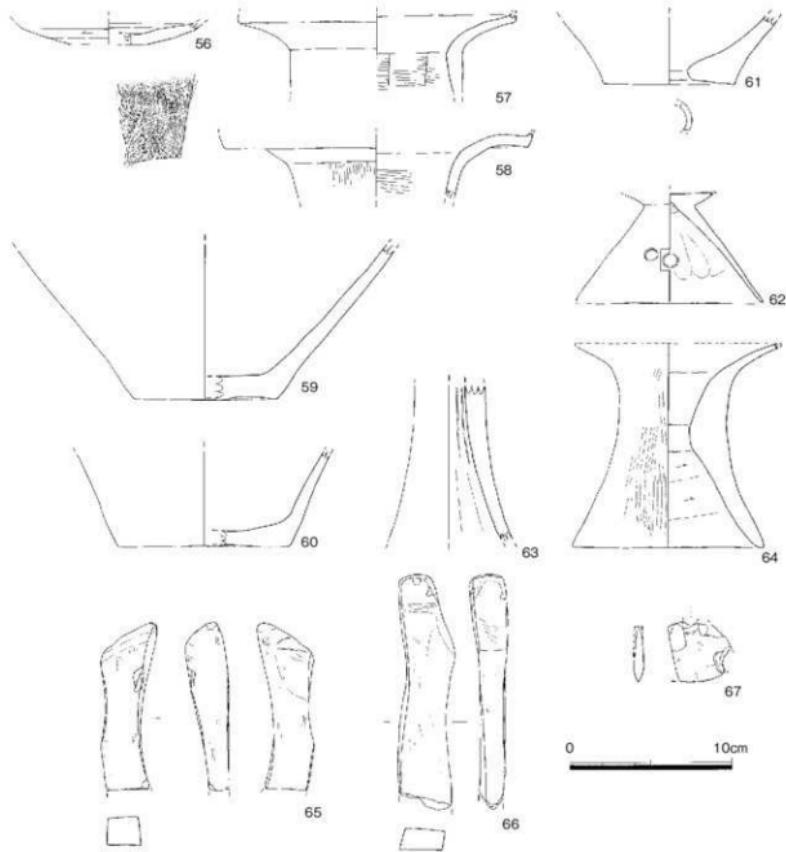
第15図 SK095実測図 (1/60) および出土遺物実測図 1 (42は1/3、他は1/4)



第16図 SK095出土遺物実測図 (47、48は1/4、他は1/3)



第17図 SP090・121出土遺物実測図 (1/3)



第18図 包含層出土遺物 (1/3)

### 3. 小結

以上簡単ではあるが、比恵遺跡群第137次調査について概要を述べた。以下には現時点で判明したことなど堅穴住居跡を中心にまとめたい。

比恵遺跡群第137次調査では小さい調査区ながら堅穴住居が10軒検出された。時期としては弥生時代中期中葉から後期にかけてである。溝は古墳時代後期の溝が1条、土坑は弥生時代後期から終末期にかけて3基発見された。

#### SC033について

SC033は遺物が少なかったがおそらく弥生時代中期中葉であると考えられる。規模は8.4×8.4mで、4本柱である。比恵遺跡群では過去の調査で環濠がしられており、第1次調査では30m、第2次調査では1辺10mの環濠がしられている。また北側にブリッジを持っており、時期は弥生時代中期中葉である。本調査区も初めは溝と思い調査していたが、柱穴が4つの堅穴住居であるとわかった。今回、南東側は調査範囲外に外れており調査できなかつたが、第2次調査で検出されたようにブリッジを持つ可能性も考える必要があると考えられる。また大小2重に周溝をもつことが明らかとなつたが類例を見つけることができなかつた。

#### SC009について

SC009は弥生時代中期後葉である。規模は1辺2.5m以上の堅穴住居である。焼土が東側に広がつていて。SC009b-b'では竈の可能性もあると考え断ち割つたが平面、断面ともに竈であるという確証はえられなかつた。

比恵遺跡群第137次調査区では10軒の堅穴住居がありながら井戸が検出されなかつた。これは道路を挟んで南側でおこなわれた第33、43次調査で井戸が第43次調査だけに13基も検出されたものとは異なる。時期的には弥生中期から後期終末である。調査面積の差かもしれないが、生活空間の中に、住む場所、水を汲む場所と分けられていたのではないか。

挿図	遺構	平面形	大きさ	主柱穴	出土遺物番号	時期
第5図	SC033	正方形	8.4×8.4m	4本	1~7	弥生時代中期中葉
第6図	SC002	?	?	?	8~9	SC033よりも前出
第7図	SC009	?	2.5m以上	(2本)	10~14	弥生時代中期後葉
第8図	SC034	?	?	?	15~16	SC009よりも前出
第9図	SC056	長方形	1.42×2.8m以上	?	17~20	弥生時代中期後半
第10図	SC049	?	?	?		SC114よりも前出
第10図	SC050	?	2.22×?	?	25、27~29	SC114よりも後出
第10図	SC114	長方形	2.8×3.75m	?	22~24、30	弥生時代後期前葉
第11図	SC095	?	?	?		
第11図	SC045	?	?	?		

第1表 比恵遺跡群第137次堅穴住居一覧表

# 図 版







(1) 調査区全景（上空から）



(2) 調査区全景（上空から）

## 図版 2



(1) 全体写真1 西側（南西から）



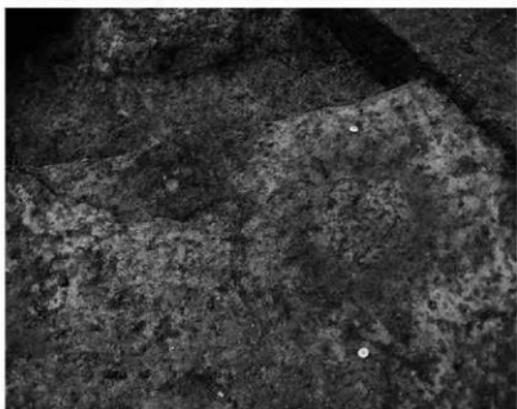
(2) 全体写真1 東側（南西から）



(3) 全体写真2 西側（南西から）



(1) SC002 (南から)



(2) 焼土換出状況 (西から)



(3) SC009 (南西から)

図版 4



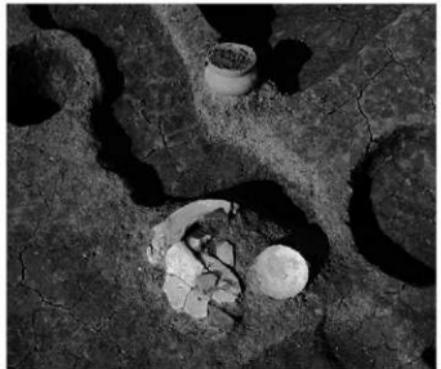
(1) SC034 (南西から)



(2) SC056 (南東から)



(3) SC056石包丁出土状況  
(南東から)



(1) SC049.050.114土器出土状況（北から）



(2) SC049.050.114土器出土状況（東から）



(3) SC049.050.114土器出土状況（東から）



(4) SC049.050.114刀子出土状況（北から）



(5) SC094 (北東から)



(6) SD035 (北西から)

図版 6



(1) SC035土層断面（北西から）



(2) SK018（北東から）



(3) SK052（南から）



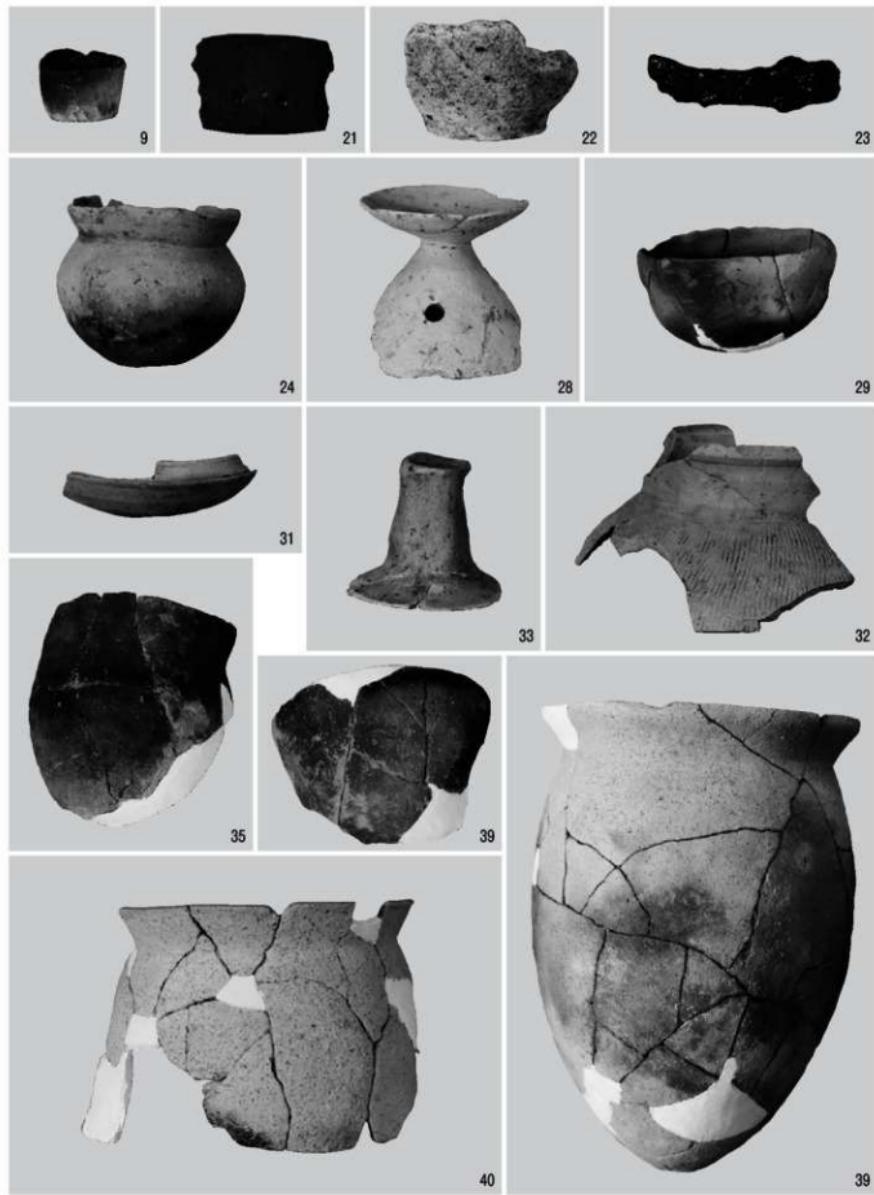
(4) SK095（東から）



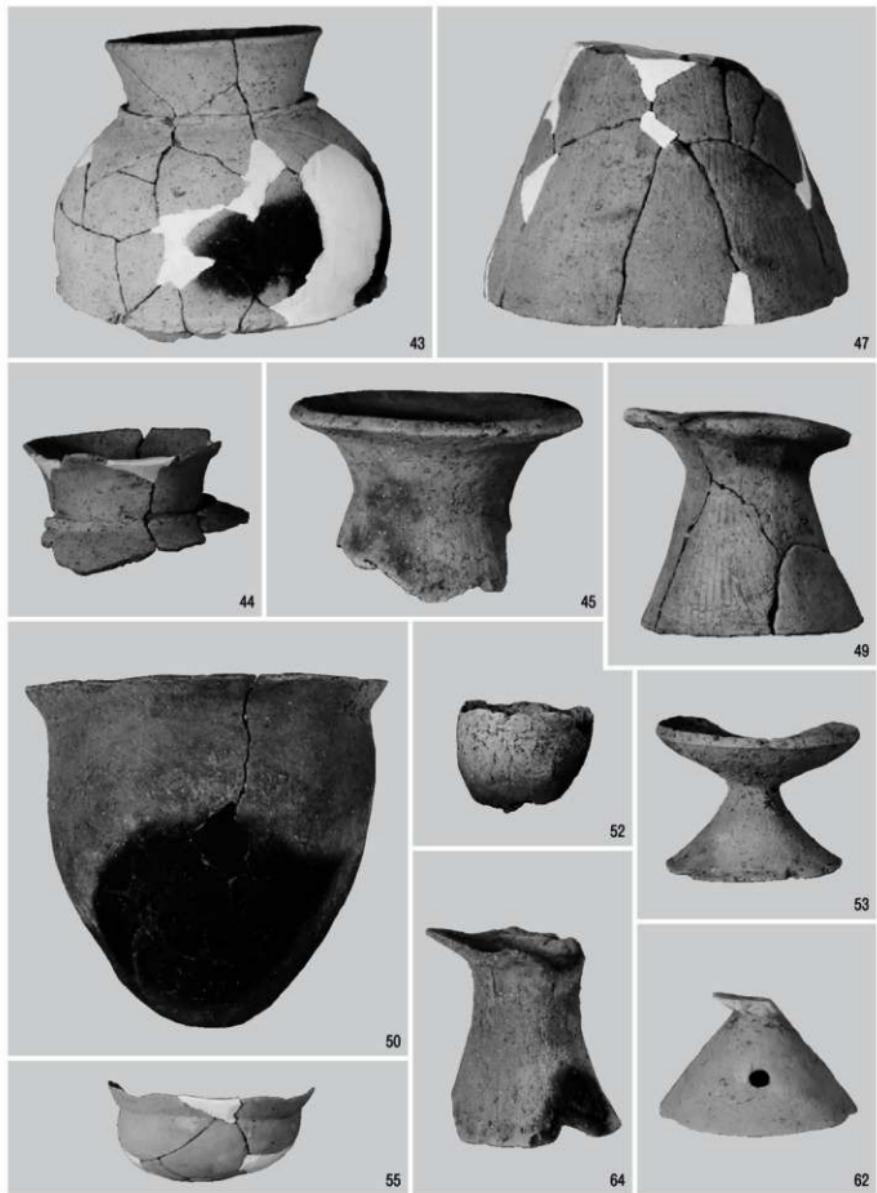
(5) SP090（南西から）



(6) SP121（南西から）



図版 8



## 報告書抄録

ひ 比 恵 77

—比恵遺跡群第137次調査報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1320集

2017年（平成29年）3月27日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印 刷 魚住印刷  
福岡市博多区大博町8-20